

《書評》

『被害と加害のフェミニズム：# MeToo 以降を展望する』

クォンキム・ヒョンヨン*編、影本剛**／ハン・ディディ***監訳、
金友子****ほか訳、解放出版社、2023 年

鳥 山 純 子†

「被害者中心主義を批判する理由」(3 頁)、「私たちは被害者という役割を拒否をする」(11 頁)。本書を開いた途端に目に飛び込んでくるのは、こうした刺激的な表現である(前者は日本語版序文のタイトル、後者は「はじめに」の副題である)。こうしたタイトルは、「被害者中心主義」にも「被害者という役割」にもどこか据わりの悪い思いを抱いていた私が本書に興味を惹かれるようになるには十分だった。そして本文を読み進み、私はすっかりこの本に夢中になってしまった。

1988 年にジョーン・スコットによる『ジェンダーと歴史学』、1990 年にジュディス・バトラーによる『ジェンダー・トラブル』が刊行されて以降、ジェンダーの議論においては、ジェンダー的課題を構造の問題として捉える視座が重視されるようになった。徹底した社会構築主義的視座に根差したスコットやバトラーの議論は、ジェンダー的課題を個々人の問題として捉える代わりに構造の問題として捉えることを提唱した。ジェンダー的議論の焦点は、社会が規定する優劣に根差した権力関係とその装置、そしてそれをどのように人々が自然化し、内面化しているのか、という社会システムの在り方へと決定的に変化した。私のような、彼女たちの後の世代の研究者は、こうした議論によって、家族への愛着を否定することなく「家族」というシステムを批判的に検討できるようになり、男性を自認する個人を否定せずに「男性性」の問題を議論できるようになった。またそうした営為を、システムそのものを改良していく取り組みとして位置付けることができるようになった。個人の問題としてではなく、構造の問題として差別や不正義を論じる道具を手に入れ、フェミニズムやジェンダー論は、特定のマイノリティだけでなく、その社会を構成する全ての人々、すなわちマジョリティにとっても生きやすい環境づくりを目指す社会変革運動として自らを提示できるようになった。そして加害と被害の分断として社会を捉えるのではなく、社会全体が、差別のない未来という同じビジョンでものを見ることを可能にした。少なくとも、理論上ではそう見えた。

ところが、その後に続く出来事は、必ずしもそうした変化を裏付けるものにはならなかった。90 年代以降、日本においても、確かに女性の就労率は上がり、正規雇用労働者と非正規雇用労働者間

* フェミニズム研究活動家

** 立命館大学授業担当講師

*** ソウル大学アジア研究所前任研究員

**** 立命館大学国際関係学部准教授

† 立命館大学国際関係学部教授

junkoybn@fc.ritsumei.ac.jp

の格差は「同一労働同一賃金」の問題と見做されるようにはなった。またハラスメントの問題化も進み、性犯罪に関わる法改正も（部分的にはあるが）成し遂げられた。最近では、日本の芸能界で隆盛を誇っていたジャニーズ事務所の性加害の実態が明らかになり、会社が事実上の解散へと追い込まれた。またお笑い界の大物が性加害を長年行っていたと告発されてテレビの表舞台から姿を消したことも記憶に新しい。ハラスメントが問題であるという認識は一般に浸透しつつあり、DVや性加害を行って、何が悪いと開き直れる時代ではもうないのだろう。しかしその一方で、女性の政治参加への意欲は依然として低く、夫婦別姓は叶わず、同性婚もすぐに認められそうにはない。障がい者や外国人を対象とした差別も止まず、入管施設における人権を無視した措置はなくなり、性暴力を告発した人々に「売名行為」という汚名が着せられバッシングがされる。フェミニズムを標榜する人々のなかに、トランス女性排除を公言する人々がいることも明らかになった。フェミニズムが抱かせてくれた協働のものと社会変革という期待は、どうなってしまったのだろうか。社会変革を考える際に覚える閉塞感や、白けたような社会の雰囲気はいったいどこからくるのだろうか。いったい何が差別の解消をここまで阻んでいるのだろうか。そして、それを乗り越える糸口はどこかにあるのだろうか。そんな疑問の中でフェミニスト的連帯に未来を見失い、へそを曲げて次の一步を踏み出せないでいる私のようなふがいないフェミニストにとって、本書『被害と加害のフェミニズム』は、一条の光明を示し、希望を与えてくれる貴重な一冊となった。

本書の目的は、過去 30 年間の韓国における反性暴力運動という文脈のもとに、現在韓国社会が対峙するジェンダー的課題に「社会のマジョリティの問題」として向き合い、その解決を目指すことにある。構成は、次のようになっている。

日本語版序文 被害者中心主義を批判する理由（クォンキム・ヒョンヨン）

はじめに 私たちは被害者という役割を拒否する（クォンキム・ヒョンヨン）

第1章 性暴力の二次加害と被害者中心主義の問題（クォンキム・ヒョンヨン）

第2章 文壇内性暴力、連帯を考え直す（『参考文献なし』準備チーム）

第3章 マイノリティは被害者なのか——カミングアウト、アウティング、カバーリング（ハン・チュン）

第4章 被害者誘発論とゲイ／トランスパニック防御（ルイン）

第5章 被害者アイデンティティの政治とフェミニズム（チョン・ヒジン）

解題 本書をいかに「使う」か（影本剛）

解題 「被害者性」という新しい文化・政治（ハン・ディディ）

本書の議論で著者らがとりわけ注意を払うのが、「被害経験」を中心とした一部のフェミニズムの在り方である。著者らはそれを「被害者中心主義」と呼ぶ。紙面の都合上、ここでは「被害者中心主義」という主題を軸に、なかでもその理論的整理を行う第1章に焦点を絞り批評を行っていきたい。

「被害者中心主義」は、最狭義の性暴力の定義を採用し、性暴力を取り締まることが難しい韓国社会において、性暴力を問題化することを阻んできた「加害者中心主義」への抵抗として唱えられ始めた概念だと第1章の著者、クォンキムは説明する。加害者側の暴力行使の意図を重視した姿勢の

転換でもあり、粘り強い反性暴力運動の成果であると言えるだろう。そんな中クォンキムは、ネオリベリズムを背景に共同体が弱体化し、代わりに自己責任論がはびこるようになった現在の韓国社会では、「被害者中心主義」は性暴力を個人化し、被害者を他者化させてしまう立場であると警鐘を鳴らす。問題にすべきは性暴力を許し問題化させない「レイプ社会」である、というのが著者の主張である(62-64頁)。「被害者」をクローズアップすることの弊害としてクォンキムが指摘するのが、被害者の孤立化である。「被害者を非難し疑う文化」(37頁)において、自らの経験を語る「被害者」は、直接的な好奇や非難の目にさらされ、人格が否定され、その身に危険が及ぶこともある。また周囲から同情的に見られたとしても、その状況で個人は「被害者」という属性に矮小化され、他者化されてしまうという(69頁)。こうした問題が具現化される在り方の一つが、性暴力の被害者が、支援者たちに利用されていると感じてしまうことだろう。この現象を読み解く上で重要なものとして著者が指摘するのが、「二次加害」である。二次加害を通じて被害者は、自分自身に「個人化」された問題として性暴力を引き受けさせられるのだ。そして、二次被害の対象となるのが圧倒的に女性であることをもって、著者は韓国社会に通底する明らかな男性優位の権力関係を看破する。

著者の関心は一貫して、いかに性暴力を個人の問題ではなく社会というシステムが引き起こす問題にし得るのか、という点にある。これは第1章だけでなく、本書に採録された論文全てに通底する課題となっている。こうした問題認識は、先述の通り構造を問題化する構築主義的ジェンダー議論の発展によって可能になったものである。しかしこうした議論が発展したのと同じ時期に世界的広がりを見せた「承認の政治」は、スタート地点では同じ構築主義的視座を共有しながら、実際には、大きく異なるものとして社会で用いられるようになった(5章では類似の議論が「アイデンティティの政治」として考察されている)。他の誰でもない自分が規定する自らの在り方としてアイデンティティを見出し、承認を通じて個々人が社会的に存在することが許されると主張する「承認の政治」は、時に社会課題解決に向けた人々の連帯を難しくする。また認識の志向性が個人のストーリーに偏重する状況を生み出している。例えば性暴力は個人の問題である以上に、それを可能にし、自然化する「レイプ文化」の問題であるというのがクォンキムを始めとする本書の著者らの認識であるが、そうした社会問題化は、唯一無二の私のストーリーでもある被害経験を社会に開くことを要請する。このような社会問題化は、何より「特別な私」を生きることが重視され、ストーリーの所有権が個人にあるような認識が主流化されている今の新自由主義的環境にあっては、被害者の利害と対立するものであり、場合によっては「被害の盗用」と見做される可能性もある。そのため、こうした議論は、すでに性暴力被害に苦しめられる被害者を一見突き放すものにも見える。また実際に被害者の影響力を損なわせることを目的とする勢力に利用されうるものでもある。だからこそ、クォンキムは、こうした議論を世に提示することに躊躇を見せる(40頁)のである。

さらにクォンキムは、何より「承認の政治」が重視される傾向のある近年の動向にも厳しく批判的な眼差しを向ける。彼女が指摘するのが、「被害者中心主義」によって被害者に道徳的優位性が付与されることによって、被害者になる競争が生まれている状況の存在である(一例として、59頁)。この被害者競争では、事実に基づく詳細な説明よりも、感情に訴えかける語りが重視され、物事の濃淡や小さな差異は捨象され、結果として性暴力を生み出す社会の在り方を問題化することがより難しくなっていると著者はいう。その理由を推測することは難しいものではない。人々の経験する被害者性をすべからず問題化してしまえば、問題間の深刻さの違いとそれを生み出す権力性が不可視化され、そこで取り上げるべき問題の焦点はぼやけてしまう。クォンキムの批判はここにきて、

「被害者中心主義」を唱える人々のみならず、おそらくクォンキム自身もその一部とする、現代の道徳的言説の在り方と、その背後にある被害者競争を支持する社会全体に向けられるのである（第5章ではさらにそれが現代のグローバルな問題として位置付けられる）。

では、性暴力の被害者に寄り添いたい、被害者という弱い立場を強いられる人々の尊厳の回復に手を貸したい、あるいはもう同じように傷つく人が生まれることを防ぎたいという良識ある支援者の思いはどこに向けたいのだろうか。クォンキムは決して、被害者の声を重視する姿勢を否定はしない。しかし、そこからスタートすることは重要ではあるが、それだけでは十分ではない、という。ではその先に必要なこととは何か。クォンキムによればそれは、性暴力を解釈の闘争と見做し、本質主義的で単純な言説をしりぞけ、個々の文脈において具体的に何が起きたのかを検証すること（「状況に置かれた」知 [59-60 頁] に着目すること）。さらに性暴力に、個人が経験する暴力としてだけでなく、社会が抱える問題の発現として対峙することである。クォンキムが重ねて強調するのが、個別の事例を権力が一線を越えた状況として詳細に検討し、それがいかにして社会に許容されてしまったのかという、社会的な問題として性暴力を扱うことの重要性である。性暴力を生まない社会を作りあげるためには、性暴力を個別の誤作動としてではなく、システムが上手く機能しているからこそ実践される行為と見做し、それが起こらないシステムを構築する必要があるのである。これは、絶え間ない継続的な社会的取り組みとして行われる他ない。こうした行程において、個々の被害者が声を上げることは非常に重要である。しかしそれと同等に重要なのが、誰かが行った問題提起を、社会全体で自らの問題として認識し、それを克服すべく動くことなのである。これは、第3章、第4章で扱われる性的マイノリティに関わる課題でも同じことである。

本書は何より、「被害者中心主義」を超えて向かうべき道筋を非常に明確に示してくれる書籍である。そしてその強みは、こうした指摘が性暴力やジェンダーにまつわるヘイトの被害者に寄り添い、その廃絶を目指して活動してきた人々によって語られる点にある。結果として精緻な構築主義的議論が展開されているが、理論的議論に先んじて、深く真摯に現実の性暴力問題に向き合う中で生まれたものである点で、本書は特別な書籍になっているのである。具体的な人とのやりとりで傷つき、悩み、躊躇し、それでも前を向き続けるために書かれた論稿であるからこそ、本書の議論には人を黙らせる凄みがあるということもできるだろう。この点については、とりわけ第2章で著者らが感じた逡巡として丁寧に記される。第2章では、文壇内部の人間として、文壇内に存在する性暴力を告発することの難しさと葛藤が描かれる。性暴力に反対する運動の難しさは、正義感にまつわるジレンマ以上に、身近な人に理解されず傷つくことや、良かれと思ってとった行動が批判にさらされること、活動を通じて経験させられる徒労感や無力感、自己への疑心暗鬼、そういった社会的人間として自分の居場所を主張しその場所をより良いものに変えていこうとする際に直面せざるを得ない生身の人間として経験させられる感情に大きく根差している。人を傷つけるのは、理論の不整合性以上に、具体的な存在に否定され、あるいは誤解される経験である。みなで同じ方向が向けない状況において、問題を認識した者からまず動く時、その先頭に立つ者には理不尽な敵対心が向けられる。また誰よりも厳しい批判が自らの行動に向けられる。社会変革を目指す人々の行く手は、あまりに険しい。しかしだからこそ本書では、現実にもまれる中で生まれた、余分な自意識にまみれていない説得力のある議論が展開されているのだろう。

私は、本書で呈示される優れたフェミニスト的議論が「フェミニズム先進国」と見做される米国

や欧州ではなく、韓国のフェミニストによって形になったことを心から喜ばしく思う。本書を執筆した韓国のフェミニストたちの信念と、難しい仕事をやり遂げるに必要だったであろうエネルギーにはただただ頭が下がる思いである。しかしまた同時に、この優れた議論が日本で出てこなかったことに無念さを感じることも事実である。韓国のフェミニストの達成に触発されて、私も今一度、希望を持って頑張りたいと思わされた。今悩んでいることが無駄ではないこと、しかし無駄にしないためには行動が必要であることだと確信したい読者は日本にも多数いるはずである。この良書を世に出してくれた著者らに敬意を覚えるのはもちろんのこと、日本語で読めることを可能にしてくれた翻訳チームにも感謝を捧げたい。